

〈論文〉

# 共感が出来るケアモードの コミュニケーション —— 読書会の会話録の分析 ——

河 原 清 志

## 要 旨

本稿は、がんの闘病に関する書籍のテキストを素材にした読書会の会話録から、参加者がどのように他者への感情に寄り添い、共感を出来させながら相互にケアを行ったかについて、仏教を思想的、倫理的な拠りどころとして、言語機能論および感情心理学の観点から検証を行うことを目的とする。具体的には、研究対象とする読書会に際し、参加者にはその場で抱えている思いを自由に語っていただいた。テキストの特定の一節を指定し、それについてどう思うか、どう感じるかを、ご自身の人生経験を踏まえて自由に意見を述べ合う形で進めた。感情の対象として、書籍や筆者に対する感情、テーマに対する感情、自身の経験を語る際の感情、自分自身に対する感情、他者が語った経験に対する感情、他者配慮に対する感情が観察された。そしてこれらが言語の六機能モデルと感情の四層モデル（原始情動、基本情動、社会的感情、知的感情）のどれに該当するかを同定しつつ、どのように相互に共感が形成されていったかを論じる。結論として、実際の発話表現における感情表出が言語のどういう機能を担い、どういう感情の種類に分類されるかを、相互に交錯し合っているために見極めが難しいものの、ある程度分析することによって、実際のコミュニケーションの場でどのように互いに共感性が高まり、相互行為が相互ケアにつながっていくかの分析の見取り図が提供できるように思われる。

キーワード：共感、言語の六機能モデル、感情の四階層説、感情の対象、ケア

## 1. はじめに

本稿は、がんの闘病に関する書籍のテキストを素材にした読書会の会話録から、参加者がどのように他者への感情に寄り添い、共感（相手の感情を理解する認知面と、相手の感情を自分も同じように感じる感情面の代理的な感情体験）を言語的表現によって出来させながら相互にケア（定義は後述）を行っていったかについて、仏教を思想的、倫理的な拠りどころとして、言語機能論および感情心理学の観点から検証を行うことを目的とするものである。

昨今、日本はIT革命が著しく進み、情報処理のツールが多様化して利便性が高まると同時に、情報過多で言語過剰な状況、つまり言語が過剰に産出されて情報が却って空回りし、自分の発した言葉に自分の本当の気持ちに乗らないとか、言葉と感情とかバラバラで乖離しているといったような印象を多くの人たちが強く持っているのではないだろうか。直接的な肉体による暴力が許されない世の中、人は言葉で傷つけ合いもする。最近のSNSはその格好の場で、人の持つ承認欲求をぶつけ合い、欲求が欲求を生んで欲望が増幅し、果てしの無い承認合戦、上から目線の無限の応酬合戦を展開しているようにさえ思える面がある。他方、人は言葉で人を癒し、慰め、愛し、尊敬の気持ちを表す。言葉によって互いの気持ちを確かめ、傷を和らげ、ワクワクする話を共有し、生きる希望を語る。つまり言葉は諸刃の剣であり、愛憎両義的な人の心の写し鏡でもある。

上述した昨今のコミュニケーション状況を憂慮すると、今まさに、真の言葉を甦らせる、あるいは言葉にいのちを吹き込んで言葉の力を再生させる智慧について熟慮する必要があるのではないだろうか。言葉を紡ぎ、意味を生み出すとは、安心できる語りの場のなかで、自分の言葉でもの語りを紡ぎ出す喜びを感じることに、他者のもの語りと共振して自分のこころを

ふるわせることの妙味を感じ、自分の人生の意味が変容していく醍醐味を味わうことであろう。これは、言葉を使って、必ずしも十分には言葉にならない言葉を互いに突き合わせながら、言葉を越えたところで心を震わせ、喜びを感じるという、言葉と心が合一になるプロセスであり、これは安心安全の語りの場が、体を緊張させたり硬直させたりせず心と体が整う場であるからこそ可能な営みであるだろう。

このような現代社会に関する問題意識に対して、古代から鮮明に解決を示してきたのが仏教である。仏教では、言葉では説明がつかない、言葉を越えた覚りの境地を真如とか勝義諦しょうぎだいという（不立文字などと禅の世界ではいう）。言葉で世の事象にラベルを貼り、分別ぶんべつしていく営みが人に執着しゅうじゃくを生み、無明むみょうのサイクルから脱することを不能にさせると説く。言葉は戯論けろんであり、迷いを生じさせるものであるから、戯論を寂滅じやくめつさせることで無分別智むぶんべつちを得ることが大切だと説く。これは、言葉を徹底的に否定すること（色即是空）によって徹底して「ことばにならないことば」の世界を見極め、そのことで蘇ってくる直感的かつ根源的な知を言葉によって体得する（空即是色）ことである。その絶えまない円環が、言葉という世俗諦せぞくたいによって勝義諦に到達し、言葉という方便によって言葉にならない言葉を越えた世界を言葉で感じ取ることができるのであろう。その他の諸宗教においても、言葉、コミュニケーションと人間の欲望・煩惱の関係性を説いているものもあろうが、本稿では以上の仏教的な視座を踏まえて、仏教から見た共感の視点に立って、以下の論を進めてゆく。

人はごくありふれた日常のなかで、言葉によって絶えず意味を紡ぎ出している。と同時に、人と人とが意味を紡ぎ出すプロセスにおいて、さまざまな感情を表出しながら互いに共感を得る営みも行っている。そしてコミュニケーションを円滑にし、人間関係を維持し発展させるために、その場のラポール（人と人との間がなごやかな心の通い合った状態や親密な信頼関係にあること）を高め、ひいては相互にケアをしながら発言をするこ

とは頻繁に見られることである。その際、我々は自らの価値を尊重するがゆえに、他者の価値をも尊重するであろう。自己と他者が絶えず優劣を意識し、競争に明け暮れるのではなく、自と他が同じ大なるもののなかで同等の立場で生き、相互に尊重し合って生きている。そのことを鈴木大拙は以下のように述べている。

より大なるものに包まれているということは、自をそれで否定することである。換言すると、自の否定によりて自はそのより大なるものに生きる。そして兼ねてそこにおいて、他と対して立つのである。自に他を見、他に自を見るとき、両者の間に起こる関係が個々の人格の尊重である。仏者はこれを平等即差別、差別即平等の理と言っている（鈴木, 1968, p. 138）。

この鈴木大拙の言葉を敷衍して、仏教学者である竹村牧男は仏教的な共感・共苦の倫理の立場から次のように言う。

自他を超えるものの中に包まれていて初めて自他であるという。そのことが認識されたとき、自己は自己のみで成立していたという考えは否定され、すなわち自己が否定されることになる。この否定を経て自己を超えるものに生きるとき、同じくそこにおいて成立している他をも自己と見ることになるであろう。あるいは、自己に他者を見、他者に自己を見ることにもなる。いずれにしても、我々は、「自と他とがいずれもより大なるものの中に生きている」、「自と他とはそれより大なるものの中に、包まれている」ということの自覚は、どの宗教においても実現するものであろう。この宗教心があってこそ、それに基づいて他者への共感・共苦の心も生まれてくると思われるのである（竹村, 2022）。

竹村は、仏教の行動原理は、超越的軌範によるのではなく、共感・共苦に基づく自発的行為にあるといえ、「他者への限らない共感」、それこそ、仏教における倫理の根本である、と言うのである（竹村, 2022）。このように心と心を交響させ、共感・共苦を大切にする言葉のやり取りは、真の意味で言葉に力が宿り、いのちが吹き込まれている状態と言えるのではないだろうか。そして「他者への限らない共感」はまさに、スピリチュアルケアにおける「ケア」の本質ではないだろうか。

ここで「ケア」について考えてみたい。ケアとは「その人が成長すること、自己実現を助けることである」と哲学者ミルトン・メイヤロフは定義している（メイヤロフ, 1987, p. 13）。そして、「他の人々をケアすることをおして、他の人々に役立つことによって、その人は自身の生の真の意味を生きているのである」という（p. 15）。医療、看護、福祉、その他さまざまな領域でケアの重要性が叫ばれており、それぞれの領域でケアの概念定義もなされている。本稿は日常のコミュニケーションにおけるケアモードのコミュニケーションを分析するものであり、メイヤロフが教育、芸術、医療などにも一般的に応用可能な形で定義しているケアの考え方に即して、議論を進めてゆく。

以上に鑑み、本稿では、「インタラクションにおける感情」に着目し、実際の日常的なコミュニケーションのなかで人は他者への共感・共苦の心をどのように言語として表出するのかについて、つまり言語と感情の関係性について、感情心理学のアプローチから質的分析の手法によって迫ってゆく。ケアの言語的手がかりを得るためである。

本稿は、発表者が現在、臨床現場での実践を手がけているスピリチュアルケアの研究の一環である。人が言葉によって意味を紡ぎ出す際、言語的成層、心理的成層、霊的成層の三層を想定することができる。本稿は、スピリチュアルな存在である人が日常的に実存的存在の発露として行う言語行動の三層のうち、言語的成層と心理的成層の関係を考察するものである。

## 2. 言語的成層と心理的成層

### (1) 言語の六機能論

上述の言語的成層で論点になるのは、言語の機能論（言語はコミュニケーションのなかでどのような機能を果たしているか）である。一般に言語学では、20世紀を代表する言語学者 R. ヤコブソンの六機能論が支持されている（ヤコブソン, 1973, pp. 183-221）。これは、社会のなかで具体的に認知できるメッセージを中心にして、コミュニケーションは6つの要素（送り手、受け手、接触回路、言及対象（コンテキスト）、メッセージ、解釈コード）からなり、これらの焦点の当て方の違いに応じて6つの機能（言及指示機能、表出的機能、動能的機能、交話的機能、詩的機能、メタ言語的機能）があるとしたモデルである（池上, 2002, pp. 88-102）。言語によって指示する対象に言及する言及指示機能、話し手の感情表出を主にする表出的機能、聞き手への働きかけを主にする動能的機能、話し手と聞き手のコミュニケーション・チャンネルを取り結ぶための交話的機能、テキストをコンテキストから浮き立たせ、テキストに向かって我々の注意関心を引き寄せる詩的機能、言語コード自体について語るためのメタ言語機能の6つである（図1）。これらの言語の諸機能を果たすうえで、感情表出は必然的に埋め込められている。したがって、どのような言語機能を果たす際にどのような感情表出が見られるかがひとつの分析対象となる。

このモデルは、単一文から構成されるメッセージを構造的にモデル化したもので、これ単独では発話のコンテキストが十全に考慮されておらず、発話出来事のダイナミズムをとらえきれていないきらいはあるが、コミュニケーションにおける言語機能を感情表出や共感の生成を考えるうえでも有意義なモデルとなる。

言及指示機能が言語の主な機能だと一般には考えられているだろう。こ

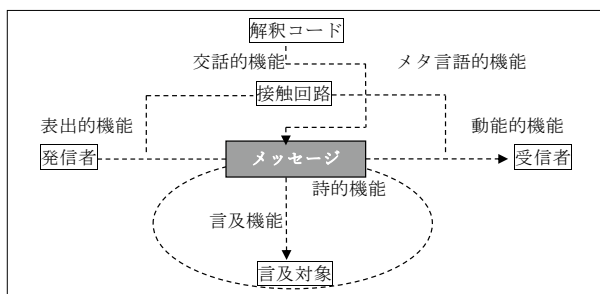


図1 六機能モデル（池上, 2002）

これは、言語によって指示する対象に言及する機能である。確かに言語の知的内容面に焦点が当たる客観性を重視したコミュニケーション空間では、対象論理が前景化するため、この言及指示機能（referential）が対人的＝水平軸において前景化すると考えられる（客観的な言葉が多用される）。他方、情感を込めた心と心を通じ合わせるようなコミュニケーション空間では、コミュニケーション参与者どうしの共感的理解の場面が多くなるため、言及指示機能に加えて言語行為的機能もかなり前景化されてくる。話し手の感情表出を主にする表出的機能（emotive）、聞き手への働きかけを主にする能動的機能（conative）、話し手と聞き手のコミュニケーション・チャンネルを取り結ぶための交話的機能（phatic）、がそれぞれである。ところが、内省的コミュニケーション、あるいは宗教的・霊的なコミュニケーションの場合だと、話者の内的対話や垂直軸での超越者との対話が中心になるため、ヤコブソンの言語機能モデルでは賄いきれない次元になってゆく。この六機能モデルはあくまでも現象界での表層構造での出来事を扱っているからである。しかしながら、現実の人と人とのコミュニケーションにおける言語的発話においては、このヤコブソンモデルは分析ツールとして有益だろう。但し、六機能のうちただひとつの機能だけを果たす言語的メッセージを発見することはまず難しく、複数の機能が同時に交錯して発動するのが実際であることに注意を要する。

## (2) 感情階層性説

次に、上述の心理的成層で論点になるのは、どのような種類の感情が言語行動とともに表出されるかである。これに関しては、福田正治が進化論に基づいた感情階層性説を提唱している（福田, 2012）。具体的には、三位一体脳説（①原始爬虫類脳・②旧哺乳類脳・③新哺乳類脳）（図2）に即して、感情を大きく情動と高等感情に分け、さらに情動を①原始情動と②基本（コア）情動に、高等感情を③社会的感情と知的感情の四階層に分けている（図3）。①原始情動は快・不快の2種類、②基本（コア）情動は喜び、受容・愛情、恐怖、怒り、嫌悪の5種類、③社会的感情は集団の関係性に関与した愛情、憎しみ、嫉妬などの感情、④知的感情は人類愛、恥、罪、甘え、幸福、自尊など文化に依存した感情でそれぞれ成り立っている。①は個体内の情動で達成欲求・親和欲求・社会的認知などの個人の特性、②は個体間の情動で対人関係・対人行動を対象とした他者意識・自己意識や他者に対する態度・援助・影響・攻撃などの行動の機能、③は集団内の感情で家族・職場・サークルなどの内部での複数の他者とそれらの特性、④は集団間の感情で集合行動と関係し面識のない第三者の存

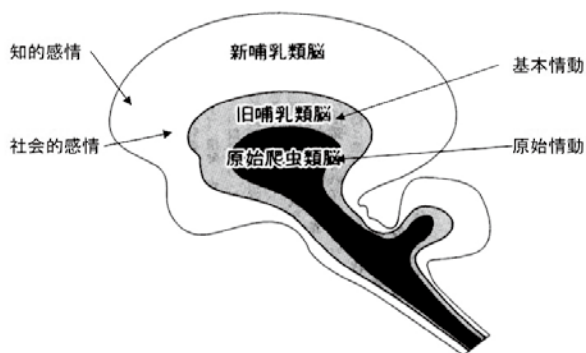


図2 三位一体脳と四階層の感情階層説（福田, 2012）





図3 感情階層説（福田，2012）

在下でのメディアや政治などの影響力や行動分析がそれぞれ対象となる（以上，福田，2004，2005，2008 も参照）。

以上を踏まえて本稿では，言語行動の三層のうち言語的成層と心理的成層が交錯する局面を，具体的な読書会の会話録を言語データとして分析する。

### 3. 研究の方法・対象

本稿が扱う研究は，もともと日常での言葉の解釈の不確定性と多様性のなかに，その人その人なりのスピリチュアリティが宿るという仮説（「スピリチュアリティの日常性仮説」と呼ぶ）を立て，この仮説を検証するために，人の人生観，価値観，人間観，死生観などを励起する書籍のテキスト（具体的にはがん闘病記に関する書籍）を素材にして読書会を実施することを目的としていた。実際に実施してみると，読書会におけるメンバー間のコミュニケーションに「ケア」のやり取りが多く見られ，読書会の後に感想を記してもらったところ，すべてのメンバーが相互にケアされたという実感を持った。したがって，「ケア」の言語的顕現に関する分析を，上記仮説の検証とは別に行うために執筆したというのが本稿の経緯で

ある。

今回実施した読書会では、人の悲嘆感情や過去の辛い経験、人生の気づきなどを励起する書籍を素材にして、6~7名からなる3グループの読書会を、2021年4月から6月にかけて各々5回にわたって実施した。グループダイナミクス（複数人による言語コミュニケーション的相互行為）のなかで、相互に感情表出や共感形成がどのように行われるか、そして回を追うごとにどのような気づきや解釈・意味づけの変化、感情表出や共感形成の変化が見られるかについて、そのプロセスを解明してゆく目的で行った。

がん闘病に関する本（宮野真生子・磯野真穂（著）『急に具合が悪くなる』）を素材にして読書会を実施後、逐語録を書き起こした。そしてその言語データについてテキスト分析を行った。読書会実施に際しては、Zoom（Zoom ビデオコミュニケーションズが提供するクラウドコンピューティングを使用した Web 会議サービス）を用いて、その様子を録音および録画した。

毎回、読書会のはじめにチェックイン、おわりにチェックアウトを行い、各参加者がどういう思いでこの場に臨み、どういう思いを抱いて読書会を終了しようとしているかについても述べてもらった。

筆者は消極的なモデレーションを行うこととし、積極的に談話管理をしたり、意見を率先して述べたりすることは行わないように努めた。尤も、参加者から意見表明を求められた場合には、積極的に自身が感じる情感や意見を述べた。その他は、できるだけ各参加者に任せて議論を進めてもらった。

読書会の回数と時間は以下のとおりである。各実施時間は19時以降の時間帯で、100分から140分程度実施した。下記括弧内の人数は筆者を除いた人数である（以下、参加者はアルファベットで表記する）。

甲組（7名）：2021年4月11日、4月24日、5月8日、5月22日、6

月7日。男性1名、女性6名、30代から80代。

乙組（6名）：2021年4月10日、4月24日、5月9日、5月23日、6月5日。男性1名、女性5名、20代から60代。

丙組（6名）：2021年4月17日、5月1日、5月15日、5月29日、6月12日。男性2名、女性4名、20代から70代。

3グループ合同読書会（7名）：2021年7月17日。3グループのなかで日程の都合が合った7名が参加した。男性2名、女性5名。

本研究では、参加者の性別・年齢・職業その他の社会的属性別の分析は目的としておらず、権力格差のない対等なもの同士が自由に議論を展開できるコミュニケーション環境という、ごく日常的に見られる場面を想定した読書会を実施した。今回、研究協力を依頼した際にも、特段、男女比・年齢のバランス・職業その他社会的属性のバランスを均等にすることを意図して参集してもらったのではなく、協力者の確保が難しいなか、協力を快諾してくださったメンバーに依頼し読書会を実現させるに至ったのであり、特段、恣意的にグループ編成に偏りを持たせたわけではない。また、がん闘病の有無などについても不問のまま読書会を実施した。以上の理由で、本稿では参加者の社会的属性などは分析対象の要素とはしていない（発話の言表的特徴からある程度、社会的属性を自由に読み取ることは、本稿の読者の任意である）。

読書会は、上記の内容を各参加者が発表しつつ、その場で抱えている思いを自由に語ってもらった。本書の著者は、宮野氏（九鬼周三・偶然の哲学の専門家）であり、医療人類学者の磯野氏とがん闘病に関する書簡を交わしたものが書籍化されたものである。宮野氏はその後、40代にして若く亡くなった。本書は1便から10便までの往復書簡を掲載している。

読書会では、各便の特定の一節を指定し、それについてどう思うか、どう感じるかを、テキストの文面を離れてもよいので、自身の人生経験を踏

まえて、自由に意見を述べ合うという形で進めた。この読書会では、テキスト理解そのものよりも、自身の意見を自由に言う場を設けることを趣旨とした。

事前に検討してもらった箇所のうち、本稿では紙幅の制約上、第4便を取り上げたもののみを以下で分析することとする。

#### 〈事前検討箇所〉

第4便96ページ【追伸】：世界への信をもって「いま」に身を委ねて、偶然を生きるのはとても素敵ですし、私はそんなふうに生きていきたいと一方で願っているのですが、しかし、この偶然に身を委ねることは、周りを巻き込むことにつながっていて、一人の選択では済まない、というところが次なる問題として待っています。恋愛の偶然に身を委ねることと、自分が病になって周りを巻き込むことはけっこう違う、というのが偶然の哲学を考えてきた私の現在一番の悩み、です。

### 4. 会話録の分析

まず、会話録の言語データから析出された結論として以下のことが観察された。読書会で相互にインタラク션을重ねるなかで、各参加者が抱いた感情の対象として、㊦書籍や筆者に対する感情、㊧テーマに対する感情、㊨自身の経験を語る際の感情、㊩自分自身に対する感情、㊪他者が語った経験に対する感情、㊫他者配慮に対する感情、が見られた。すべての参加者のほぼすべての発言に感情表出が見られたが、その一部を引用しながら順に検討してゆく（会話録の引用箇所の下線部は筆者による）。

#### ㊦書籍や筆者に対する感情

甲組Fさん：

宮野さんがこの九鬼について、九鬼周造について書いている文章だとか、あるいは九鬼周造の人物像みたいなものを私なりに感じて、その方にだんだんと惹かれていったんですね。

[分析] ここでは、Fさんが筆者の宮野氏へ言及指示し、そこから敷衍して九鬼へと言及指示対象を拡張する心的プロセスのなかに、②基本情動が見て取れる。この書籍、そして筆者が基底にしている思想を支える九鬼の思想を感じ取り、他者である筆者や九鬼に対する意識や態度を表出している。そして、この基本情動についての言明は自己言及の形式でなされている。

乙組Lさん：

この部分を読んで初めて何かこう、この人の人間味みたいのが、人間らしさみたいのがちょっと見えてきたなと思って安心したところがあるんですけど。この追伸の部分のちょっと前のところで、病気で不安に駆られた私は、合理性で未来を予測し自分を守ろうとしていました、と。できるだけ乱されたくない、自分だけで何とかしたいとか、そこで見失っていたものってというような記述があると思うんですけど。で、あの世界の信と、偶然に生まれてくる今に身を委ねる勇気なのだなって言うところ。ここを読んで初めてこの方の感情というか、本心というか。正直なところが表に出てきた感じがして。今までそれが見えなかったので、私がモヤモヤしてたんですけど。ちょっとほっとして。こういうことが、正直に言えるようになったんだと、このやり取りをしているうちに。って言うのはちょっと感じたんですね。で、今日の部分、追伸の部分で私がちょっと思ったのは、病気で周りの人を巻き込むものと恋愛で巻き込む巻き込まれるは違うと。絶対それは違うだろうと私は思っていて。

[分析] 「安心した」「モヤモヤしてた」「ちょっとほっとして」という言語の表出的機能を用いた表現に、Lさんの個体内で生起した快・不快に近い

①原始情動が見て取れる。これは当該感情を他者へ向けるものではなく、自身の内面で生じた感情である。著者に言及指示しながら、著者に対する印象が変化していくなかで、自身の感情がどのように変化していったかを自己言及的に言明している。安心したという表現によって、書籍や筆者を理解する達成欲求が満たされたことを表している面もある。

乙組 H さん：(乙組 L さんに後続する発話)

そういういろんな偶然って言ってもいろんなのがあるんですけど、でもきっとあれですよ、最後にこの追伸のところで、今 X さんがおっしゃったように宮野さんがすごく、なんていうか、自分の中のいろんな弱い部分とか、どうしようもない部分を出してきて、なんていう表現してるのは、なんか私はほっとするなという気がちょっとしています。

[分析] H さんも L さん同様、安心感を得ている。H さんは、発話の冒頭に「そうですね、今 L さんが言ってくださったように」と L さんの先行発話に言及指示することで、L さんへの共感を表明している。H さんのこの箇所でも①原始情動が見て取れる。

丙組 M さん：

私もここを読んでさっぱり意味がわかりませんでしたし、今もよくわかりません。率直に感情をそのまま発露すると、この人はやっぱり自分1人で生きていけると思ってたらしいんだなっていうふうに感じました。恋愛にしろ、何にしろ、人間1人で生きていくことができないので、もう既に巻き込んで。だから私は何を言ってるんだろうってというのは率直な感想です。

[分析] 「意味がわかりません」という言明は、自己の④知的感情に言及することで直接面識のない筆者に対する評価を表明しつつ、自尊に関わる文化に依存した感情を表出している。そして、筆者に対し「この人は自分

1人で生きていけると思っている」と言及指示しつつ、「っていうふうに感じた」と自己言及するという二重構造により、③社会的感情をも表出している。これは読書という行為により著者と自身を社会的に関係づけ、筆者の言明をMさん個人の経験と化し、関係づけられた他者へのややネガティブな感情を表明している。「私は何を言ってるんだろうってというのは率直な感想です」という発言は、③社会的感情の表明そのものである。

#### ④テーマに対する感情

甲組Bさん：

私自身は偶然性という言葉はあまり好きではなくて、やっぱり必然として受け止めて向き合っていきたいなっていうふうに。じゃないと自分がこう何かそこでくじけて、心が折れてしまうんじゃないかなあというふうに思っ。はい、あまりこの言葉好きではないなっていうことにちょっと気づきました。

[分析] Bさんは自己の感情に自己言及することで①原始情動を表出していることが見て取れる。同時に、偶然性や必然という難解な文化概念を語りながら、「くじける」「心が折れる」といった感情表出に関する言明をしていることからすると、④知的感情にも大きく関わっている。

#### ⑤自身の経験を語る際の感情

甲組Fさん：

私も東日本大震災のその日に仙台にいたんですけれども、[…] やっぱりどうして自分が助かって津波に遭われた人は、津波に遭われたのかっていうことですね。だからそこに対しては何か本当になんていうか、申し訳ないような気持ちってうのかなかそういうふうに何か言葉にしてみましょうと私はぶったような感じなんだけれども、どうしてもそういう気持ちっていうのは持つと思います。

[分析] Fさんは自身の被災経験に言及し、被災者と自身の社会的関係性のなかで③社会的感情を表出するとともに、大きく文化的事象に関わることとして④知的感情をも表出している。被災者と自身の両者に言及指示するという言語構造を取りつつ、両者の関係性の深さを自身で結びながら被災者への感情を吐露している。

甲組 E さん：

因果関係の怪しさっていうんですかね。これを一番感じたのは、私がパワーハラスメントを職場で受けて、それで委員会に訴えるかどうか。あるいはうちの身近な親族が弁護士をやっていて、それでこれを訴えるべきだってすごく言われて。サポートするからって言われたんですよ。そんなときに確かに私はあの職場に行って具合が悪くなったけれども、その原因は2人の人物の発言でそうなったのかっていう因果関係が私の中ではやっぱりしっくりこなかったんですよ。どうしても。なので私が訴えないことで、例えば組合にいた人が私が一人引き下がって、パワーハラした方はのうのうと何もなかったかのように偉そうにしていて。そういうのを見るのはすごくくやしいとかっていうふうに私にメール、多分本当にね、善意で私を応援してるって意味でしてくれたんだと思うんですけども。なんかそれもしっくりこないっていうか、ずっといくら追求してもそこって、答え、ないなと思ったんですよ。なのでその因果関係っていうのは明確じゃないっていうのが私の結論というか。なんていうのかな、感覚としてある。で、その偶然性について書かれてるところとか、自分の中ですごくしっくりきたっていう。ちょっと感覚的な言葉でうまく均衡ができていないですけども。

[分析] Eさんは同じ組の同じ回で、Fさんの後に発言している。パワーハラについての自身の経験について言及するなかで、筆者が投げかける偶然と必然の論点に対し、自身の経験の因果関係が「しっくりこなかった」と



②基本情動を表出している。また親族の③社会的感情についても言及しつつ、それについても自己言及的に②基本情動を表出している。そして最後に筆者の主張に共感を寄せながら「すごくしっくりきた」と②基本情動を表出している。

### ①自分自身に対する感情

甲組 D さん：

例えば自分が選択したことによって、相手の人生に何かを及ぼしたくない、みたいなそういう考えで割と生きてきた時期があったので、[…] 自分が他人の領域に何かを及ぼしてしまうと他人がざわざわするのはもちろん、自分もそれでざわざわしてしまうので、病気になってただでさえエネルギーが散漫してるというか少ないときに、さらにその自分のエネルギーが放出、なんかどっかに流れていってしまうことはやりたくないみたいな感じで、とにかく自己完結したいっていう思いなのかなって勝手に私は解釈して読んでました。

[分析] D さんは自身と他者との関係性のなかで、他者に対する②基本情動や自身に対する①原始情動について自己言及的に「相手の人生に何かを及ぼしたくない」「自分もそれでざわざわしてしまう」「やりたくない」「とにかく自己完結したい」と言明している。②は対人関係・対人行動を対象とした他者意識・自己意識や他者に対する態度・影響・攻撃などの個体間の情動であり、①は達成欲求・親和欲求・社会的認知などの個体内の情動である。

甲組 B さん：

何か皆さんのご意見聞いたあとで言うのってすごい難しいですね。難しいなって初めて最後の方に当たったので感じています。

[分析] この「難しい」という発言は、個体内の①でもあり個体間の②で

もある。また、読書会という社会関係におけるインタラクションでの感情表出であるため社会内の③でも文化的な④でもある。この「難しい」という単純な言葉が言及指示している複合的な奥行きの深さを読み取ることができる。

#### ④他者が語った経験に対する感情

甲組 D さん：

あと最後の最後でその C さんのその不運な人を不運と見なくなった、一筋の輝きを見ることによって偶然が必然じゃないかって思うように、思えるようになったみたいな部分とかもなんかちょっと私鳥肌が立ちそうというか、そういう方と実際にお会いしたかわからないんですけど、なんとなくそういうのがわかるかも、みたいな感じで、今までコメントしてはった方の意見に私はふんふんみたいな感じで、すごい感動してきたなっていう感じで、やっぱり 1 人で読むのと全然違うなっていう印象で今日の時間は特にそういう感じで過ごしていました。

[...] いや、多分なんか勝手な解釈ばかりしてるんだろうなと思って他の人の意見、コメントを聞いてすごい私はもう本当に自分に寄せて寄せて、その感想文とかコメントシートもそういうふうに書いてたなと思って、ちょっと恥ずかしいかなとか思って振り返ってたところなんですけど、こういうところに参加させてもらってなんかいろんな意見聞くのって、あと発言するのが楽しいんだなって思います。ありがとうございます。

[分析] D さんの発言は、読書会という社会的な場で明確に他者を認識したうえで③社会的感情の表出を行っている。これは C さんの先行発言に対する言及指示を行いつつ、自身の感情を自己言及的に表出するという言語構造を取っている。「鳥肌」「ふんふん」「すごい感動」という表現によって共感の形成を行い、その場のラポールを確保しつつ、ある種、他者に対するケアを行っている。「恥ずかしい」と謙虚な感情を表出しつつも

「楽しい」という場の一体感を感じさせる感情を表明することで、読書会という知的な場が情感に訴えるケアの場にもなっていると言える。

#### ⑦他者配慮に対する感情

甲組 A さん：

こうやってお話聞いてみると、皆さんが割合あんまり困難を持たないでお読みになっているように僕には見えてね。わあ、すごいなって。どうしてこんな文章がよくわかるのかなっていうそういう印象を、まず最初に持っています。[…] 今僕は感じてるのは、皆さん方すごいな、違う文化を持ってるんだなっていうような感じね。

[分析] A さんは他の参加者に直接言及指示しながら、自身の親和欲求や社会的認知に関する①原始情動を素直に表出している。これにより、相互に共感が形成され、ラポールが確保されて、互いにケアをし合うモード（認知・思考・感情表出などの形式）のコミュニケーションが展開していることが読み取れる。これは言語の表出的機能のみならず、交話的機能も深く関わっている。

甲組 F さん：（甲組 A さんに後続する発言）

私も実はこの本読んだときに、なんかちょっとなんていうか読みながら読み心地が悪いというか、居心地が悪いというかちょっと体に合わない洋服を着たようになっていうか、そういう感じは否めなかったんですね。

[分析] F さんは A さんの直後に発言をしている。A さんがこの本は読みづらいと発言した先行発言に直接言及指示することによって、A さんとの共感性を醸し出し、甲組読書会という場のラポールを形成していることがわかる。言語構造としては、書籍に関する①原始情動の表出ではあるが、これが同時に②③④の側面も有しており、個人的な感情表出のみならず、社会的、文化的感情をも共有することで共感性を高めている。

丙組 O さん：

皆さん、もっとわかりやすく言われへんのかなっていう感じっていうんですかね。そんなんは、この人から皆さん感じてはるんやろなと思いました。好感をもって捉えてないっていう意味ですけどね。

[分析] O さんは、他の参加者が抱いている著者への①原始情動を想像しつつそれに言及指示することで相互の共感性を高めている。丙組でも他のグループ同様、他の参加者の感情に言及し共感することでラポールを形成し、ケアを相互に行っていることが読み取れる。

## 5. 考察

以上の分析結果を総括すると以下のような考察結果となる。

### ⑦ 書籍や筆者に対する感情：

言語機能に関して、まず感情表出自体は言語の表出的機能である。また言語の言及指示機能により自己や他者へ言及することで、言語により社会的関係性が取り結ばれる。言語的成層でのこのような機能が前提となつて、心理的成層においては、個体内および個体間での感情表出である①原始情動や②基本情動が本読書会では多く見られる。これは、基本的に読書行為において筆者と読者が単独で読書という対話を行うなかで感じる感情に関わるからである。しかし、読書という行為により著者と自身を社会的に関係づけたり、第三者に関わる文化的な感情表出をしたりする場合は、③社会的感情や④知的感情も大に関わってくる。

### ① テーマに対する感情：

書籍のテーマは、面識のない第三者の存在下でのメディアや政治などの影響力や行動分析に関わる感情表出であることが多いため、

概して書籍のテーマに対しては④知的感情が深く関わってくる。

㉗ 自身の経験を語る際の感情：

発話者は自身の経験に関わる当事者と自身の両方への言及指示をすることで、社会や文化に関係する③や④の感情を表出することが多い。対自身に関する感情表出の場合は、②の感情を表出する。

㉘ 自分自身に対する感情：

基本的に自身に対する感情表出の表現行為は自己言及的であるため、①や②の感情が基本ではある。しかし、同時にそれは読書会という社会関係におけるインタラクションでの感情表出でもあるため、その場のラポールの形成にも関与しており、③や④の感情表出の側面も同時に認められる。

㉙ 他者が語った経験に対する感情：

相互に共感を呼ぶ③社会的感情を表出することで、読書会という場にラポールが形成され、一体感を得ながら相互にケアをするというケアモードのコミュニケーションが展開していることが読み取れる。

㉚ 他者配慮に対する感情：

他者の感情に対する言及指示を行うことで、言語の交話的機能を高め、共感性を強固にし、読書会がケアモードのコミュニケーションの場となっていることが読み取れる。

## 6. おわりに

本稿は日常的に交わす言葉のやり取りにおいて感情表出がどのように共感を形成し、場のラポールを高め、ひいては相互のケアになっていくかについて、読書会の会話録を対象として言語の六機能論と感情の四階層性説から考察を試みた。本稿で扱った感情、共感、ラポール、ケアなどの概念は多義性が高く、それぞれの概念が別稿による深い議論を要するため暫定

的な定義で議論を進めた。しかしながら、実際の発話表現における感情表出が言語のどういう機能を担い、どういう感情の種類に分類されるかを緻密に分析することで、実際のコミュニケーションの場でどのように共感性が高まり、相互ケアにつながっていくかの分析の見取り図がある程度提示できたのではないかと考える。

昨今、「論破」という言葉が流行っている。たしかに、他者を知的に論戦で打ち破って自らのほうが優位に立つことも時には大切かもしれない。しかし、互いに自身の感じる素直な感情を表出しつつ、互いに他者の感情を尊重し合いながら共感性を高めてゆくことで、知的メッセージに不可避免的に張り付いている生身の感情を味わうことも大切であろう。これがまさに、相互の共感を高め、相互の「ケア」になってゆくというケアモードのコミュニケーションである。スピリチュアルケア学者である伊藤高章が言うように、癒す（他動詞能動態）、癒される（他動詞受動態）という操作性を押しつけて、ケアの真只中に〈癒える〉（自動詞）という中動態が立ち現れるようなケアのあり方を大切にするならば（伊藤, 2021, p. 55）、ケアをすることが正義であるからその規範に従うべきだという他律的なケアを行うのではなく、他者の苦を取り除きたいというごく自然な内発的・自律的な他者への共感・共苦の心（利他的な心）が、自ずから出来てくるであろう。人と人と言葉を交わす際に感情を素直に表出して、言葉に血が通い、言葉に癒える力が宿るようなコミュニケーションが、ケアモードのコミュニケーションなのである。

## 付記

本論文は、人工知能学会の言語・音声理解と対話処理研究会（SLUD）第95回（2022年9月15日）での発表「ケアモードのコミュニケーションにおける感情表出と共感形成—読書会の会話録の分析」の内容を書き改めたものである。

### 引用文献

- 福田正治（2004）「現象としての感情——愛と憎の原動力——」『富山医科薬科大学一般教育』第32号, pp. 13-27.
- 福田正治（2005）「感情の複雑化——社会的感情の発生——」『富山医科薬科大学一般教育』第33号, pp. 1-14.
- 福田正治（2008）「感情の階層性と脳の進化——社会的感情の進化的位置づけ——」『感情心理学研究』第16巻第1号, pp. 25-35.
- 福田正治（2012）「感情階層説——『感情とは何か』への試論——」『富山大学杉谷キャンパス一般教育』第40号, pp. 1-22.
- 池上嘉彦（2002）『自然と文化の記号論』日本放送出版協会
- 伊藤高章（2021）「『スピリチュアリティの定義』をめぐる——スピリチュアルケア理論構築に向けての序説——」東洋英和女学院大学死生学研究（編）『死生学年報2021年』（pp. 41-60）. リトン
- ヤコブソン, R. (1973)『一般言語学』川本茂雄・監修・田村すず子・村崎恭子・長嶋善郎・中野直子（訳）みすず書房（Jakobson, R. (1963). *Essais de linguistique générale*. Paris: Editions de Minuit.)
- メイヤーロフ, M. (1987)『ケアの本質 生きることの意味』田村真・向野宣之（訳）ゆみる出版（Mayeroff, M. (1971). *On caring*. New York: Harper & Row.)
- 宮野真生子・磯野真穂（2019）『急に具合が悪くなる』晶文社
- 鈴木大拙（1968）「霊性的日本の建設」『鈴木大拙全集』〔旧版〕第九巻, 岩波書店
- 竹村牧男（2022）「仏教における善悪の問題をめぐる——共感・共苦の倫理学を考える」WCRP 平和研究所研究会発表資料, 2022年10月18日, 普門メディアセンター

（原稿受付 2022年10月26日）